

ぼく・わたしが生まれる、ぼく・わたしが大きくなる

大宮 せい子

1、はじめに

2年生の担任になって、今までも3回ほど「ぼく・わたし生まれる、ぼく・わたしが大きくなる」という誕生の授業を試みてきましたが、意外にも子どもにとって赤ちゃんは身近な存在でないことに驚いたり、日常生活の中で、親がわが子に誕生にまつわる話を聞かせたりすることがめったにないようだと気がつきました。

カマラード27号で小野寺由美子先生の『たんじょう』の授業の実践が報告されています。それに刺激を受け、生活科の最後の授業で、自分の誕生から現在までの成長を、家族からの聞き取り調査をしながら、「命の誕生の不思議さ」、「家族との交流の中で、みんなに助けられて大きくなった自分を見つける」、「友だちの成長もいろいろな育ち方・違いがある」ことを学び合いたいと考えました。

親同士が、共通のテーマである子どもの誕生や子育てについて知りたいと思っても、互いの関係が希薄になってきている現状では、なかなか聞いたり話し合ったりできないものです。他者を理解することは教科をこえて大切にしたいことですが、子どもの誕生は、個別的であっても共有できる題材なので、親同士、親子・子どもたち同士が互いに分かり合えるような授業を組み立ててみたいと思いました。

2、授業の組み立て

学年日よりで保護者に次のようにお願いをしました。

生活科の授業で、生まれてから今までの自分の成長を見つめる学習をします。自分の成長がおうちの方をはじめ、たくさんの人に支えられてきたことを知り、また、みんなの成長の様子を交流することでお互いの理解を深めることでできればと考えています。

そこで、お子さんの生まれたときのこと、あるいは今まで育ててきたなかにどんなドラマがあったかを教えてください。出産を迎えるときの不安や喜び、祈り、病気や事故など一番心配したこと、こんなひとに育てほしいという願いなど・・・子どもに話して聞かせるように書いてください。

母子・父子家庭もあるので、誕生にまつわる取材は書ける範囲でお願いをしました。意外にも保護者は協力的で期日以内にとっても詳しく書いてきてくれました。

子どもたちにも「生まれるとわかった時から生まれるまで、家族のみんながどんなことを思ったか」「いつ、どこで生まれたか、体重、身長」「名前の由来」などを聞いて書いてくる課題を出しました。子どもたちは、母親から自分の誕生にまつわる話を聞くことで、今まで経験したことのない家族の自分にたいする思いを知って、とても新鮮な気持ちになったようです。授業での発表を待ちきれなくて「先生、ぼくが生まれてくるのをみんなうんと待っていたんだって」と、はにかみながら話しかけてくる子どももいました。

親が書いてくれた文章を2時間かけて私が読んで聞かせました。

「小さいころ夜泣きがひどくてたいへんだった。」「人見知りが激しくて心配だった」「ものぎらいが多くて困った」などのように書かれた子どもたちは、最初、恥ずかしいから読んでほしくないと言いだしましたが、友だちの様子を聞いているうちに、自分と同じだと分かって少し安心したせいか、最後は全員の文章を読むことができました。

出産を迎えるまで、つわりがひどくずっと入院しなければならなかったKくんのお母さん、逆子のため毎日お腹をさする運動をしたM子さんのお母さん、生まれてから黄疸がひどくそのまま2週間も入院していたM子さん。川崎病で何度も入院して点滴を受けたYくんのことなど、誰もが同じ状況で生まれてきた人はいなかったことが分かって、なつきさんは「みんなドラマみたい。」と感想を話しました。みんなも「誕生の話っておもしろい。」と口々に言い出したのでした。

2年生の学級指導の中に「おへそのはなし」が1時間設定されています。指導内容として「おへそのはなし」「おへそのある動物・ない動物」「子宮の中での赤ちゃんの様子」と3つあります。低学年では、体のしくみを取り上げる前にやるべきことは、自分の誕生の話をしてもらうなかで、「みんなに祝福されて生まれてきたこと」をまず、一人ひとりに実感させたいと思いました。生を受けて誕生したことは、自分にとってこの上なくうれしいことと受け止めさせ、2年生ながらもちゃんとした自立を促したいと願ったからです。

「誕生から成長」まで4時間授業をしました。命の誕生の授業のとき、一人ひとりに2cm四方の黒い紙に針で穴を開けたものを渡しました。「なにこれ?」「なんか穴があいているよ。」「ほんとだ!」などと言いながら、とても興味深く眺めていました。その針の穴の大きさが自分の命の最初の大きさであることを教えるととても驚いていました。こどもたちは、その命が、とてつもないたくさんのお父さんの精子のなかの1つとお母さんの卵子とが受精してできることを知り、「かけがえのない命」であることを感じてくれました。

その後、春日先生が4年生で「人間」の授業で使った人間・動物・植物の発生過程の絵や図を見ながら、生き物の誕生までをクイズ式にやってみました。これまでアサガオなどの植物やダンゴムシ、テントウムシなどの成長過程をまとめてきていたので、比べてみると、それぞれの発生過程の途中までは見分けがつかないほど似ていることにびっくりしました。

次に、自分の成長について、家の人といっしょに思い出に残っていることを話し合っ書いてきたものの中から、一番心に残ったことを発表する準備にとりかかりました。この発表会は2年生最後の授業参観日に予定をしました。保護者には1人2・3分ぐらいの内容で、子どもの発表内容に補足をってもらうことをおたよりでお願いをしておきました。何人ぐらい話してくれるか全く予想できなかったので、時間は4時間目と5時間目に設定し、発表順番と時間も知らせておきました。

この授業では、「友だちの小さいころの話を聞き、友だちへの思いを深める」「友だちの話を聞いて、自分のことをさらに考える」きっかけになるようにねらいを考えてみました。

お腹の中にいたころの様子を聞いて発表してくれたのは弘武くんです。お母さんの文章には、弘武くんが生まれる前に死産を経験したことで、新しい命の誕生にとっても感激し、「こんどこそちやんと元気な赤ちゃんを産みたい。」と願ったことが書かれていました。お母さんの願いどおりとても元気な弘武くんが生まれました。学校ではちょっと忘れ物が多く、泣き虫ですが、今はやさしく思いやりのある弘武くんになっています。

同じくお腹の中にいたころの様子を発表してくれた令佳さんのお母さんは、生まれるまでつわりがひどかったそうです。つわりの症状は、会社から帰ってきたお父さんの顔を見ると始まるようでした。チャイムがなったとたんに気持ち悪くなったという話には、保護者の方々から爆笑ものでした。

2才のころのようすを話してくれた優花さんは、今でもデパ地下での試食会に出会うと思ひ出すそうです。お祖母さんとお母さんと一緒に買い物しているうちにひとり離れてしまい、優花さんはそのまま地下で試食しようとしていたそうです。必死に捜し回っていたお母さんがそれを見つけて「食べちゃダメ!」と言った言葉が今でもトラウマとなって強烈に残ってしまった話をしてくれました。

3才のころのようすを話してくれたのは7人、男の子ばかりでした。腕白を地でいった体験発表でした。聖哉くんは、よく気づき面倒みがよくみんなに好かれています。落ちついた行動で頼もしくスポーツマンの彼が、3才のころは活発で目を離したらどこへ行って何をするか、みんな心配だったそうです。お母さんは、公園で遊ばせるときも事故のおきないようにハラハラ目をかけていた話をして、「えっ、うそでしょ。聖哉くんが!」と誰も信じられないようでした。

郁寿くんは、妹が生まれたときとてもさみしい体験をした話をしました。ストレスが溜まり、自傷行為があり、お父さん、お母さん、保育所の先生たちが大変心配したそうです。その郁寿くんが3番目が生まれることをお母さんから聞かされ、すぐ下の妹に自分のような寂しい思いをさせないようにと気を使った話をしました。発表の下書きを書いているときから思い出しては涙ぐんでいました。両親が発表を聞きにきていました。懇談会に残ったお母さんは、かわいそうな思いをさせてしまったことと、妹思いの心づかいを知り今まで以上に郁寿くんを愛

しく感じたことを話してくれました。7才になったばかりの郁寿くんが、妹にたいしてこんなに思いを深くもっていたことを知り、胸が痛くなりました。

この授業のあとで、誕生から7才までのアルバム作りをしました。思い出の写真を貼ったり、絵をかいてそのころの思い出や感想を書き留めて仕上げました。

3、家の人へ手紙

子どもたちが誕生の勉強をしたあとに家の人へ手紙をかきました。

◆てるいあすかさん

私が生まれたのはお母さんがいたからです。お母さんは私が生まれるのをまっていたんですね。お母さんがんばって生んでくれてありがとうございます。私が赤ちゃんのころたいへんだと思いました。でもお母さんがいたから私がうまれたんですね。お母さんがほんとうにいてよかったと思います。私のことをせわしてくれてよかったです。お母さんがいてよかったなあ。お母さんがいたのでこんなに大きくなったんだなと思います。やっぱりごはんをつくってくれたりして、すごくやさしいなあと思いました。お母さんがそだててくれてありがとうございます。お父さんもいたので私がうまれたんだなあ。お母さんもいてよかった。人げんのままでよかったです。お母さんがいてうれしいです。お父さんがいてうれしいです。

※あすかさんは、幼稚園時代に金魚鉢の中をのぞき込もうとして、それを抱え込もうとして割れたガラスが額に差し込んできて、畳が血の海になったように出血したことをお母さんが一番心配したことで書いてきてくれました。本人はそのときの様子は全く覚えていなかったのですが、お母さんが書いてきてくれたことで始めて事実を知って、お母さんへの想いが深まっていったようでした。

◆なかがわゆうたさん

生まれてはじめて手じゅつしてぼくが手じゅつをしているときとお母さんはいないたのでしょう。ぼくもはじめて手じゅつと言われた時はこわくて、手じゅつはしたくないなと思いました。だけど手じゅつ室に入って、ますいをかけられて、それからぼくも分かりませんでした。一日こうたいでつきそってもらった時は、とてもうれしかったです。ずっとベットの上にはいたからたちあがるとふらふらしてすぐにたおれてしまいました。だけどいつしようけんめい足をうごかしたり、お母さんといっしょに手をつないでばい店に行ったり、びょう室に近いじどうはんばいきとかいすのあるところにしょっちゅう行って、そのうち、みほとおねえちゃんとじいちゃんとかあちゃんがおみまいにきた時はうれしかったです。それから足をうごかして歩けるようになりました。

※ゆうたさんは、よくお腹が痛いとお母さんに休むのですが、それが盲腸からきていたことが分からなかったようでした。夏休み中、いつものように痛むので薬を飲ませても痛みが続き、医者に行ったら、あと数時間遅れたら命取りになったと医者から話されたそうです。病気を通して自分が家族から大事にされているのを知ってうれしかったことと思います。

◆木下よしきさん

ぼくの生まれるべんきょうをしました。みんなのをきいたときびっくりしたりすごいと思ったりたのしそうだなあといろいろおもいました。でも、ぼくとおなじさかごの人がいました。それをきいてびっくりしました。おなじ人もいるんだなあとおもいました。ぼくもいろいろしりたかったです。

※よしきさんはクラスで一番背が小さく、登校時から給食のメニューで嫌いなものがあると、元気がなくなるほど物嫌いが激しい子でした。4人兄弟の末っ子のためか、甘えん坊で我がまま放題のところがあって、自分以外の人に興味も持たなかったのですが、誕生の学習したあとは、いろんな人のことを知りたくなって、友達に関心のよせる子に育っていきました。

◆しお田ゆうかさん

私が生まれたのはお母さんが生んでくれたから生きていることをしりました。私が仙台に引こして来たその時は大声でないた。今はまたなきそうになるくらいかなしいと思った。私が赤ちゃんの時、ミルクをのむとき、いっきにのんでしまうので、いきがくるしいかどうかしらべるきかいをつけてのんでいた。それを見たお母さんが「私の子だけ、びょうきな」と思ったそうだ。心ばいしてくれてうれしかった。私が大きくなったのは先生、お母さん、お父さんが今まで私をそだててきてくれたから、ここまで大きくなったんだなあ。

※ゆうかさんは、赤ちゃんのとき、お母さんが「私の子だけ、びょうきなの」と心配してくれた思いをしっかりと受けとめ、うれしさを感じています。友だちと遊ぶことが好き。図書室からいろいろな本を借りては夢中に読んでいて、新しいことを学んだ日は、必ず帰りの会で詳しく話して、いい意味での刺激を与えてくれます。自分だけでなく、回りの人のことも考えられるやさしい子に育っています。

◆かみ谷あいさん

わたしがはじめて生まれたのはハリのあなの大きさとおべん強ではじめて知りました。あとはわたしがアトピーやぜんそくのときとてもしんばいしてくれたりマッサージでなおしたりしてくれてありがとうございました。あとはわたしのことをとてもしんばいしてくれてありがとうございます。もうアトピーがなおったのはお母さんのおかげです。わたしが赤ちゃんのときはとてもたいへんだったんですね。だいにそだててくれてうれしいです。けどいまだいにそだててくれてたん生のべん強をしてみんなのおかあさんもわたしのうちのおかあさんとなっているなあと思いました。あとはちゅうじえんになって毎あさいやがらずびょういんにつれていってくれた。ちゅうじえんはもうなおりました。やっぱりおかあさんはわたしのことを思っているおかあさんなんだなあと思いました。みんなおかあさんにはいるんだなあと思いました。そしていまはとてもげんきなわたしをみるとあんしんするんですね。わたしを生んでくれてありがとうございます。いまわたしがここにいるということはお母さんがいたからいまここにうまれてきているんです。くるしんでわたしをうんでくれてどうもありがとうございます。お母さんわたしはおかあさんがたのしみにまわっていてくれてとてもうれしかったです。

※あいさんは、アトピーやぜんそくの発作が続き、いつも体中の湿疹に苦しめられていました。お母さん自らがマッサージ療法を学び自宅で治療を続けてアトピーを克服し、今はあいさん自身もマッサージ療法を学んでいるそうです。病気のため学校も休みがちだったのに、今は、プールにも入れて楽しいと絵日記に書くようになりました。優しくて思いやりのある、感性のいい子に育っています。

4、終わりに

人の誕生は、家族の絆を強め、周囲の人たちのやさしさをも引き出してくれました。家族の愛によってこの世に生を受け、育っている自分を見つめることができた子どもたちでした。

自分も、友だちも育ってきた過程には、いろいろなできごとがあったことを知り、そのときの家族の対応が今の自分につながっていることを感じとることができました。

誕生の授業は、2年生だけではなく学年の節々で扱える教材であると思います。誕生を出発としながら、人間が生まれるということや自分の体をつつめさせるチャンスになり、学年が上がっていくなかで、学んだことを自分の力で広く考えることができるようになると思います。

今まで、ヒトの誕生だけを扱いましたが、今回は、動物も植物も同じ地球に生まれて生きている仲間であることや、人は、人からも他の生き物からも学んで「人」になっていく文（「ほんとうはどうなるの」こどものせいかつ2一橋出版の「たんじょう」と「しぜんはめぐる」）を読み合ってまとめの授業としました。

（「カマラード」41号より転載）